
緋弾のアリア～イ・ウーのだらだら少女～

Canan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア～イ・ウーのだらだら少女～

【Zコード】

N7167X

【作者名】

Canan

【あらすじ】

この物語は、成り行きでイ・ウーの立ち上げに協力し、初期から所属している、目的もない、暇人のだらだら少女のぐだぐだなお話です。

基本的には原作に沿つつもりです。ぐだぐた、だらだらが嫌いな方は回れ右です。

ご感想やご意見をお待ちしております。

第1話（前書き）

緋弾のアリアを読んでみて、二次創作を書きたくなつたので、書いてみました。

第1話をどうぞ！

「ねえ、教授。ワインないんですか？」

「君は外見が未成年だろ？ 見た目が二十歳になつてからにしなさい」

「ええ、いいじゃないですか、外見が未成年でも、実際生きている年数は教授より長いんですし、別に差し支えありませんよ」

「駄目だ、お茶で我慢しなさい」

私は今、とある潜水艦の中で、教授と人々のディナータイムです。申し遅れました。私は姫咲桜ひめざきさくらと言います。私はイ・ウーの初期メンバーであり、また武偵高校の強襲科の生徒でもあります。

初期メンバーと言つことは年齢が軽く100歳は越えています。まあそこは糺余曲折ありまして、普段は武偵高校の生徒をしていますが、ちよくちよく厄介事が入ると、イ・ウーのメンバーとして暗躍しています。

厄介事は殆ど理子に押し付けているので、余程の事でない限りは動きませんが。

「で、君はどうするんだ？ 私の寿命はそう長くはないのだよ？ いい加減にイ・ウーを引き継ぐつもりになつたかね？」

「嫌です！ 何回言つたら分かるんですか？ あんな個性的過ぎるメンバーを纏めるなんて、考えただけでもゾッとします」

そう。これはただのディナーではなく、教授が私にイ・ウーを引き継がせる為に説得する、謂わば交渉の場。

「でも、それを私はやつて来たんだよ?君もやれば出来るさ」

「やるにしても、私がイ・ウーを引き継ぐことにパートナは賛成しないと思しますよ?」

私の質問に教授は即答した。

「さあ、それは分からぬ。やつてみないと」

「いや、分からぬと言われても困ります…………まあ、私は成り行きで、組織立ち上げに協力しただけなんですから、そんな大役を押し付けないで下さいよ」

「と云つことは……私が居なくなつた後、組織が崩壊することになるがいいのかい?」

教授は顔を曇らせて聞いて来る。私は松阪牛のステーキを一口食べた後に答えた。

「はい、もし組織が崩壊したとしても、別に私は構いませんし、独りでやつて行けますから……で、崩壊後はこの潜水艦を私が貰いますけどね」

私がそう云つと、教授は笑いだした。

「潜水艦だけとは、これはまた面白い」とを言つ

「私的にはラジコン形式にして、好きな時に呼び出しの出来る、基地にしようと思つてますけど、別に構いませんよね？」

「ああ、構わないさ。私が居なくなつた後には好き勝手に使つてくれ」

「分かりました……明日は学校なので、そろそろ寮の方に帰らせて貰います。このお話はまた今度で」

私は席を立ち、教授にお辞儀をして、部屋から去り、扉を開いた。すると、教授が言った。

「桜よ、毎回私は思うが、君は美味しい食事を食べるために話を引き延ばしてないかね？」

ギクッ！

「そ、そんなことないですワ？」

「語尾が棒読みになつていて、どうやら図星の様だ」

「し、失礼しました！」

私は、赤くなつて、顔がバレンのように、かなり深い会釈をして扉を勢い良く閉めた。

いつから教授は分かつてたんでしょうか？これで7回目のディナーですから、3回目くらいでバレてましたかね？ どうなんでしょう？次のディナーで聞いてみましょつか。

（1時間後）

「ふう～疲れますね～」

私はあれから、偽装した巡視艇を操縦し、武偵高校まで戻つて來た。今は女子寮に向かつて、暗い夜道を歩いているところです。

私の部屋は2階の一一番手前の部屋です。階段を登り、部屋のドアを開けよつとした時、ドアが勝手に開きました。

「勝手に人の部屋に押し入つていいなんて、言いましたか？」

私が暗い部屋に向かつて、そつ言つと、フリルの沢山付いた改造制服姿の同業者が出て來た。

「なんだ4世ですか、最悪なお出迎えですね～」

「だから、あたしのことを数字で呼ぶなと言つてんだろー。」

理子はそつ言つて、素早い動きで私の首にワルサーM99を突き付ける。

「こ～加減にしちよ～どこつもこいつもあたしのことを『4世』と

呼びやがって、ふぞけんなー。」

理子は威勢の良い声で叫けんでいた。

「なんですか？『ふぞけんな』はあなたの方ですよ、底辺の癖に調子に乗るのも程々にしないと、心臓に鉛をぶちこみますよ？」

「ふん！イ・ウーの中でもお前は強いと言われているが、果たしてどうなんだろうな？ハツタリじやねえのか？いい加減、厄介事をあたしに押し付けずに自分でやってみたらどうだ？この能無しー。」

理子は数字で呼ばれることに沸点が低いですね～

やつぱり数字で呼ばれるのは嫌いみたいですね。まあ理子もこんな夜中にサイレンサーなしで撃つとは思えません。警笛のつもつなのでしょう。

今日は相手をするつもつはあつませんし、寝たいし、帰つて貰いますか。

「どーでもいいから、早く帰つてくれません？明日から学校なので寝たいんですよ」

「はあ？お前から吹つ掛けでおいてなんだよーまあいい、覚えてろよ？こつかお前をぶち殺してやるー。」

理子はそう言い、自分の部屋へと去つて行きました。
しかし元を正せば、人の部屋に勝手に押し入つっていた理子が一番悪いと思いませんよ？

それから私はお風呂に入り、ゆっくじとバスタイムを楽しんだ後にはすぐ布団に入る。

ふう～もふもふです～

じゃあ寝ますか、お休みなさい。私は眠りについた。

（次の朝）

「ふわあ～起きますか」

私の朝はかなり早い。5時起きです。布団から出で、背伸びをするまずは朝ごはんつと。

棚から買い置きしているクロワッサンを取りだし、インスタントコーヒーを作る。

ちやぶ台にコーヒーを乗せて、パンを頬張った。

「もつ、こんな時間ですか」

時計を見ると、始業時間まで後、10分。私は食器を片付けて、制服に着替えて、ホルスターにいた相棒（デザートイーグル・50 AE版）とを装備して、学校に赴く。

5分くらい、だらだら歩くと、学校に着く。一年A組の教室に入ると、理子がこつちを睨んで来た。

まだ昨日のことに引き摺つてゐみたいですね~元を正せば、理子が悪いのに。

「おおー桜ちゃんおはよー!」

「おはよーひやわこまく」

この人は武藤剛氣、車輛科の優秀さんですね。
乗り物ならなんでも運転出来るそうですが、どうなんでしょうか?
任務が一緒になつたら分かりますね。

「桜、おは...よ...」

「おはよーひやこまく」

死にかけた声で私に挨拶をしてくるのは、遠山キンジ。普段は弱いが、ヒステリアモードの時は警戒すべき人物です。
周りの噂によれば、最近、教授の子孫とべたべたしてると聞きました。いつの間にそつちの世界に踏み行つたのでしょうか?

私は挨拶を返して、自分の席についた。

「で、キンジの隣の席は誰なんですか?なんか剛氣が別の場所に移動している気がしますが?」

「ああ、それはすぐに分かるわ」

キンジがそう言つと、私よりちちぢやく、ツインテールの少女が教室に入つて来ました。

なるほど、確かに、教授の言つていた通りの姿です。こいつが教授の子孫で緋弾の継承者（予定）ですか。

「キンジ！ あんた私を置いて行つたわね！ 風穴よ！」

「大体、アリアがこんな時間にももまん買いに行つなんて言つのが駄目なんだる、だから俺は先に登校したんだる」

ふうん、どうやら私が欠席していた内に色々あつたみたいですね。
「で、キンジ！ あたしの席の前にこいつ誰なの？ 昨日は居なかつたけど？」

「む、態度が悪いですね。教授はとても物静かで良い方なのに……子孫は態度がゴミみたいですよ教授。

「こいつ？ あなたは態度が最悪ですよ？ 誰と比べているのかは言いませんがゴミレベルですね。初対面の人に対し、こいつ扱いとは……礼儀の知らないお子さまのやることですよ」

私は緋弾の継承者にどれ程の力があるのか、試す為にわざと挑発してみる。すると案の定、乗つて来た。

「お子さまへ…… あたしはお子さまじゃない！ ふざけんな！」

「ダアン！」

お子さまはホルスターから銃を抜き、私の顔すれすれに撃つてきた

「次、あたしにそんなこと言つたら風穴よー。」

へえ、射撃の腕はかなりの物ですね。ですがまだまだです。緋弾の継承者にしては、少し幼過ぎるのでは？

私はこの東京武偵高校に入つて、2年目です。ちなみに知り合いは4人しか居ません。遠山キンジと武藤剛氣と星枷白雪と理子です。3人とは1年の時に、理子とは勿論、イ・ウーで知り合いました。この高校は普通の高校がやるような一般的の教科が5時間目まであり、そこなら専門に分かれるようになっています。

私は強襲科なので、科の授業になると知り合いは居らず、毎回一人になります。授業と言つても、専ら射撃訓練や模擬戦などで、とてもハードなものです。

能力がバレない様に、射撃訓練の時は的を外したり、模擬戦の時はわざと負けたりして、なんとかバレずに今までやつてきました。

放課後になると、基本的には寮に帰つて昼寝、若しくはゲーセンで時間潰しくらいしかしません。

私は学校が終わると、足早に教室から退散して寮に帰ります。

私が今日ははどうじょうかと、考えていると、寮の建物の2階の廊下から白雪が降りてきました。

「久しぶりね、白雪」

私の挨拶に白雪が反応し、ニコッと笑みを浮かべた。

「久しぶり、桜ちゃん。昨日はなんで休んだの？」

「まあ色々あってね」

イ・ウーの次期リーダーについての話を潜水艦でしていたなんて、絶対に言えない……まあ言つても白雪はイ・ウーをまだ知らないと思うから大丈夫だろうけど。

でも、いざれ教授の目的により、緋弾の継承者はイ・ウーの存在を知ることになるとは思う。勿論私の正体もバレてしまうでしょう。その時は武偵高校から離れることになる。

だから悔いの残らない様に高校生活を楽しまないと。

「で、白雪は何処に行くの？って聞かなくても分かるわよ。キンジの所でしょ？」

「うんー！キンちゃんの為に沢山」飯作つたから、届けに行くの

白雪は幸せそうに顔を緩めている。本当にキンジのことが大好きなんですね。その一途さには感服します。

ん？ちょっとストップ。

普通、白雪ならキンジに女の子が引っ付けば、すぐに黒雪になる。私がよくキンジと遊んでいた頃によく黒雪化した 緋弾の継承者が引っ付いているのに黒雪になつていない つまり、白雪は緋弾の継承者のことを知らない 付いて行くと面白いことが起きたー。

よしー決めた。今日の放課後はキンジ最大の難を外野で観察しますか。

「白雪、私も付いて行つても構いませんか？」

「はー、一緒に行きましょー」

白雪はとても一囁きした顔で頷き、やつかった。

やっぱり、白雪はキンジに緋弾の継承者が引つ付いてることを知らないでしよう。

まあ白雪がどんな反応をするのか楽しみです。

私と白雪はお喋りしながら、キンジの部屋に向かって、歩き始めた

第1話（後書き）

第1話、どうだったでしょうか？

かなりぐだぐたで書いてるので文体が無茶苦茶で、誤字・脱字だらけだったと思いますが、後書きまで読んでくれている読者の方々、ありがとうございます。

これからもこここの更新速度で行こうと思つておりますので、よろしくお願いいたします。

第2話（前書き）

『前回のあいさつ』

桜は教授と、イ・ウーの次期リーダーについて7回目のディナーを行い、次の日に、アリアとの初邂逅。

その後、白雪と一緒にキンジの部屋に向かいました。

白雪と私は数分歩き、キンジの寮の部屋の前に着いた。

ピン、ポーン

白雪がボタンを押すと、乾いたチャイムの音が鳴る。数十秒経つと、中からキンジが出てきた。

「だ、誰だ? って白雪と桜か」

「あっ、キンちゃん……あのこれ、お夕飯作って来たから、キンちゃんに食べてもらおうと、思って持つて来たの」

白雪はさすがに、包みをキンジに渡していた。

「はう~キンジ、なんか焦つてるみたいだけど、何か隠してないですか?」

私がそう聞くと、更に焦りだした

「な、何もない?」

「ふ~ん、なんか怪しいわね~その喋り方と聞こ、おひおひしている態度が」

私は徐々におひおひしているキンジを追い詰めて行く。あ~楽しい

尋問が得意なこと有名な綴とか言つ教員はこの楽しさを毎回味わ

い

つていいのね。私も尋問の技術を勉強しようかな？

「いや、本当になんでもない」

「さ、キンちゃん一様子がおかしいけど、大丈夫？熱出していない？」

普段と喋り方や動作などの様子がおかしいキンジに白雪は心配している様ですね。

まあなんせ、白雪は昨日、超能力捜査研究科、通称SSRのことで手が離せなかつたらしく、キンジの所に行けなかつたと、来る途中に嘆いてましたからね～

一途な白雪からしたら余程心配なのでしょう。

私は散々弄つて満足したので帰ることにします。流石に緋弾の継承者が部屋の中にいることがバレるとキンジが可哀想なので、白雪も一緒に連れて帰りますか。

バレて黒雪化するのは次にお預けです。

まあ可哀想と言つのは、表向きの理由で本当はこの楽しさを何回も味わいたいだけですけどね。

「白雪、キンジは大丈夫です。ほら田も暮れて来ましたし、夕飯を渡して早めに帰りましょ～」

「で、でも……」

「白雪、キンジは疲れてるみたいだから、早めに寝かせてあげない

と黙田でしょ？本格的に熱でも出したらいざりあるの。私たちがいる」とじでキンジも氣を使つと思つますよ。」

「そ、そりですね、キンちゃん一歩り休んで元氣になつてね」

「ああ、分かつた。白雪、桜、ありがとな」

キンジはやう言つて、ドアを閉めた。

私たちは女子寮に向かつて、歩き始める。

ふう～キンジも色々と苦労してますね。緋弾の継承者には田をつなられまし、世話焼きの巫女さんは積極的ですし、ゆっくり休める間がないので、疲れも溜まるのは確かでしょ。」

「ねえ、田雪。もしキンジが世界を又に掛けて暗躍するよつた組織と戦つことになつたら、どうしますか？」

「もししそつなつたら、私は必ずキンちゃんの力になるよ。キンちゃんの為なら、星枷のきまりを破つてでも力になる。でも桜ちゃん、どうしてそんなことを？」

「私は白雪の心意気を聞きたかつただけよ」

その後、寮に着くまでの間、田雪にノロケ話を永遠と聞かされた。今更ですが、こんなこと聞かなければ良かつた……

「じやあ桜ちゃん、また明日」

「じやあね、白雪」

寮に着いた私は白雪と別れ、部屋に戻る。部屋の時計を見ると、もう6時だった。

はあ～暇になりましたね、何しようかな？

私はジャージに着替え、カーペットを敷いてあるやがいぶ台の近くに寝転び、古い雑誌を読む。

（4時間後）

ああ～暇、ひまひまひま～！

雑誌を読んだり、ネットをしたりしていましたが、それでも暇過ぎて仕方がないので私はコンビニに出向くことにしました。暗い夜道を独りでトボトボ歩き、コンビニに向かいます。

「桜、久しぶりね」

「はあ～用があるなら早めにしてくれません？コンビニに行く途中なんですか？」

私がそう言ひと、路地の曲がり角から、絶世の美女が出てきた。と言つても女装しているだけですけどね。

「なんだ力ナですか。用があるなら早めに済ませて下さいね。私もあなたと駄弁つている程、暇ではないので」

「じゃあ单刀直入に言つわ、今、教授は何処に居るの？潜水艦の場所が掴めないので」

力ナは心底困つた様な顔をして私に尋ねてくる。

「潜水艦が何処に居るのか、私にもよく分かりませんよ。最近、潜水艦には行つてませんし」

私は嘘をついた。教授は恐らく、力ナ、いや遠山金一がイ・ウーを内部から崩壊させようとしていることを知つてゐるのでしょう。だから力ナには場所が分からぬ様にしていると、私は思いますね。

それに今、潜水艦の場所を知つてゐるのは多分、私ぐらいです。

私は他人と関わることが少なく、メリットがない限り、易々と情報を流すことはありません。その私の性格も考えて教授は動いているはずですからね。

後、力ナに嘘をつきましたが、今まで監視されているような感じはしなかつたので、大丈夫でしょう

力ナは私の言葉に、納得する様な様子を見せると、

「そうですか、では自力で探してみます」

そつとカナは暗闇の中に消えて行った。

まあ、カナの様子は納得した感じでしたが、本心は納得してはおらず、渋々引き下がった様ですね。

今、私と戦ったとしても、時間を無駄に使うだけだから、カナは効率的な方を選んだに過ぎません。

ふう～やつとコンビニへ、行けます。しかしカナが来るとは予想外でしたね～

それに崩壊させる様に働きかけなくとも、教授が居なくなれば、自然崩壊するはずですからね、カナは完全に無駄足です。

コンビニに着くと、私は雑誌を読み始める。すると……

「お嬢様ちゃん、もう10時だよ？お家に連れて行つてあげるから帰りましょう？」

婦人警察官の方でしょ？私にそう話し掛けてきました。

全く！失礼ですね！確かに背が低いので、そう見られるかもしれません、私は高校生ですよ？中学生や小学生ではありません！

「私は武蔵高校の生徒です！決して中学生や小学生ではありません

私がそのままでも、警察官や店員さんや買い物に来ていたおばさんまでもが、優しい田で見てくれる。

「一体、なんですか！そんな優しい田で、喚いてる子供を温かく見守つてゐるみたいじゃないですか！」

「ねえお嬢ちゃん、もし武偵なら武偵高校の学生証ない？」

「そうです！その手がありました。武偵高校の学生証を見せれば、分かってくれます。」

「ちよっと待つてね」

「うへんと……」

「あつー……そ、やうにぱぱジャージに着替えたから……学生証は今頃、壁に掛けてある制服のポケットの中」
「ああ～やつてしましました。」

「こつなつてしまえば逃げるしか……先手必勝！
私はダッシュでコンビニから逃げました。」

「ちよっとお嬢ちゃん！待ちなさいーって速つー走るの速つー！」

警察官の方はこんなことを言つていましたが、私が素直に捕まる訳
がありません。

こつして全速力で走り、武偵高校の校門まで辿り着きました。

武偵は夜の任務もある為、常に校門は開いていますが、24時間体制で監視されており、敵が入るとすぐに分かる仕組みになっています。

そこを通り、やつと女子寮の私の部屋に戻つて来ました。

ふう～久々にいい汗をかきました。お風呂に入るとします。

私がお風呂に入り、10分くらい経つた時に、チャイムが鳴つた。

ピンポーン！

こんな時間に誰でしょうか？私は素早く服を着て、相棒（デザートイーグル・50AE）を持ち玄関の覗き穴から、外の様子を窺う。

成る程、またもやイ・ウー絡みですか。

私が扉を開けるとそこには……

第2話（後書き）

『次回予告』

次回は、桜の部屋にとある人物が訪れます。イ・ウー絡みです。もう分かつたと言つ方もいるでしょう。

理子の行う『武偵殺し』の方も激化して行きます。

その時、だらだら桜はどう言つた対応を取るのか？

お楽しみに～

（次話の内容は文章量により、予定を変更するかもしません。予め「」で承下下さい）

オコサの癡騒（痴情歌）

“えりちゃん、 いそばんは

今日は桜のプロフイールになつます。予定を変更してしまって、申し訳ありません。

オリ主の概要

（主人公）

名前……姫崎桜ひめざきさくら

年齢……1000歳以上。（月の民であり、平安時代にかぐや姫を迎えた従者で月には戻らず、日本に逃げて暮らしている）

身長……150cmくらい、体重は極秘。知ると一瞬で葬られる。

スリーサイズ……そんなに執拗に聞くと、どうなるかお分かりですよね？

学年とランク……学年は2年A組でランクはA

携帯武器……デザートイーグル（・50AE）、スペツナズナイフ。

基本的にはデザートイーグルを片手で使う。スペツナズナイフは緊急時のみ。武器の手入れは自分で行っている。

超能力……unknown

特徴……茶髪のロング、瞳は黒。部屋では専ら、ジャージを着ている。

備考……極度のアイス好き。特に好きなのがスーパーカップの抹茶

味。週に20個くらい食べるが、全く太らない。……摩可不思議。冷凍庫の中にはストックとして5つは入れてあるらしい……

本来の年齢は1000歳を越えているが、見た目は未成年なので、教授はワインを飲ませてくれない。しかし非合法でワインを手に入れ、飲んでいる。

イ・ウー立ち上げに成り行きで協力し、なんとなく所属している。教授とはイ・ウーを立ち上げる前からの仲で、よく二人でご飯を食べる程である。

あまり戦うことに対する興味がなく、任務もやる気がなく、だらだら過ごすのが専ら。しかしさる気を出すとチート。

昔、通りすがりにぶつかつて来た男に、食べていたアイスを落とされたという理由だけで瞬殺したくらいである。

桜は、殺した男が世界に8人しか居ない、Rランクの武僧だつたことに後に気付き、驚いたらしい。なので現在、Rランクの武僧は7人に減っている。

うーん、食べ物の恨みは大きい。

ちなみにイ・ウーの中で仲が良いのは、教授とジャンヌだけ。

理子は、桜がRランクの武僧を瞬殺したことを知らない為、実力について疑っている。

日常生活……普段はだらだらしており、授業を受けては居るが、真面目ではなく、居眠りをし、教師の中では才能の無駄遣いと呼ばれている（だらだらしているのに、ランクがAである為）

寮では昼寝かネットで勉強など全くしない。机に埃が被っている程

である。

ゲーセンが好きで、UFOキャッチャーの腕はプロ並み、取つてき
たぬいぐるみやキーホルダーを部屋に飾つてゐるなど、乙女な一
面もある。

また面白い事が好きで、アリアのことが、白雪にバレてしまう
ンジの様子を見て楽しんでいる。

武偵高校に知り合ひは4人しかおらず、キンジと剛氣と白雪と理子
だけで交友関係は少ない。

オリ主の概要（後書き）

桜のプロフィールはこんな感じです。ご意見やご感想をお待ちしています。

ここでは、原作をあまりお知りでない方の為にRランクについて、説明した方が良いのではないか、と書いた意見がございましたので、補足をさせて頂きます。

Rランクとは Royal つまり、武僧としては最強のランクです。アリアのSランクよりも高く、原作では世界に7人しか居ないとされています。

この小説では、Rランクの武僧が元は8人居り、その一人を桜がとんでもない理由で殺した設定になっています。

次回こそは第3話になると思います。お楽しみに

第3話（前書き）

『前回のあらすじ』

桜のプロフィールでしたので、あらすじはありません。

扉を開けるとそこには……

ジャージ姿のジャンヌ・ダルク30歳がいた。
結構、似合つてますね、部活帰りの女子高生って感じです。

「久しいな桜、元気だつたか？」

「ジャンヌ！久々ですね」

ジャンヌは、大きなスーパーの袋を持っていた。

「ほり、お土産だ」

ジャンヌはそのスーパー袋を私に差し出した。それを受け取りジャンヌを中に入れる。

「どうぞ、部屋に入つて」

「お邪魔する」

部屋の隅に立ててあるちゃぶ台を真ん中にセットして、向かい合わせに座わり、私はジャンヌに話し掛けた。

「で、今日はどうしたんですか？私が出ないといけないよつの問題でも発生しました？」

私がそう聞くと、ジャンヌは首を横に振つて答えた。

「いや、桜と久々に長話がしたくてな、土産を持って立ち寄つたと言つてだ」

「そうですか。最近お互いに忙しくて話もあまりしてませんからね。長話をするとじましょ」

「良いですね。今日は久々にだらだら飲んで食べて、朝まで駄弁りますか？」

「ああ、やうするといよ」

私の提案にジャンヌは頷き、深夜の女子会（一人だけ）が始まった。

大抵、ジャンヌが私の部屋に訪ねて来る時は、問題が発生した時か、親友として長話をする時くらいです。

それも理子やカナが活発に活動している、この状況から考察するに前者の可能性が高い、そう私は思ったのですが、見当違いだつたみたいですね。

私には一つ疑問に思う所があつたので、ジャンヌに聞いて見ることにしました。

「ねえジャンヌ、なんでジャージなんですか？」

私がそう聞くと、ジャンヌはおろおろしている。いつもの態度とギャップがあつて、凄く可愛いです。世間で言つぱりヤップ萌えとはこう言つモノなのですかね？

「そ、それは…………い、いつも会う時に桜はジャージが快適だと言つていただろ？だ、だからどうなのか試してみたのだ」

「そうだつたんですか。確かに以前、そんなことを言つた覚えがありますが、ジャンヌが他人に感化されるとは珍しいですね」

「それが着てみたら意外と快適でな、甲冑よりも良かつたのだ。但し一つ問題があつて」

「なんですか？」

すると、ジャンヌは困つた表情を浮かべて言つた。

「ショッピングセンターを一人で歩いていると大勢の視線を感じてな。見られていることが恥ずかしくなつて、商品を買い、猛スピードで退散したと言う訳だ。あれは誤算だつたな、まさか私があんなに注目を浴びるとは……」

「ふふふwww」

「なつ！桜！何を笑つてゐるー。」

それは恐らく、ジャンヌがあまりにも綺麗だからだと思ひますけどね、日本に銀髪の美人さんなんて居ませんし。

けど、これを直接言つたらジャンヌが照れて、頭から湯気を出し、無言になりますから、辞めておきましょう。弄るのも適度にしないとジャンヌが可哀想です。

あつーそう言へば、コンビニに行つたついでに夕飯を買おうと、思

つっていましたが、警察官に追われていた性で忘れてきました。どう
しましょ？

材料なら色々、冷蔵庫の中にはあります、こんな夜中に調理するの
は面倒です。

「ジャンヌ、夕飯つて済ませましたか？」

「ああ、済ませて来たが？ 桜はまだ済ませてないのか？」

「ええ、まだですよ。警察官に追いかけられてしましましたからね」

何事も無かつたかの様に私が言つと、ジャンヌは驚いていた。

「け、警察？ イ・ウーのメンバーだとバレたのか？」

「いいえ、コンビニで雑誌読んでたら、補導されそうになつたので
逃げてきただけですよ」

「やうか、なら良かつたな」

「ですね、バレたらここに匿るといふことが出来なくなりますからね」

私がイ・ウーだってバレたら、ここに匿ることが出来なくなります
し、公安の課に追われることにもなる。それだけは避けたいですね

しかし、その内にキンジと緋弾の継承者はイ・ウーの内部について
知ることになるはずです。その時、イ・ウーに私が所属しているこ
とが発覚しないようにしなければなりません。

一番手っ取り早い方法は、今、ここらにいるイ・ウーの仲間、つまり、理子、カナ、ジャンヌ辺りを一掃して口封じすれば良いのです

が、大親友であるジャンヌを殺すことは出来ません。

元々、ジャンヌの母親は私と決闘し、そこで負った傷が原因で亡くなつたそうです。

そしてジャンヌは親の敵である私を殺しにきました。そこからイ・ウーに引き込んだのは私です。

勿論、引き込んだからには最後まで面倒を見てあげるつもりですよ

さてと、難しいことを考えていても疲れるだけですから、夕飯としてアイスでも食べますか。

「ジャンヌ、私は夕飯としてアイスを食べますけど、ジャンヌはどうします？アイス食べますか？」

「私はいい、遠慮しておく」

ジャンヌは要らないらしいので、私は席を立ち、冷蔵庫のある台所へと向かう。

冷蔵庫の一番上の扉を開き、中にあるスーパーか？の抹茶味を3つ取り出し、スプーンを持って、リビングに戻ると、ジャンヌが口を大きく開けて、ぽか～んとしていた。

「や、桜、お前は3つもアイスを食べるのか？」

「はい、そうですけど？」

「お腹、壊さないのか？」

「大丈夫ですよ、いつもこんな風ですから問題ありません」

私はベッドに座り、一つ目の蓋を取つて「ヨミ箱に捨て、食べ始めた。

「桜、ほんの少しだけ重要な話があるから、聞いてくれ」

ジャンヌは姿勢を正座に直して、私の方に向く。
なんでじょうか？やつぱり最近の緊迫した状況についての話ですか
ね？

「何ですか？」

「ここ最近、カナは教授の子孫、つまり神崎・H・アリアについて
探つてゐる。それが何の為か分かるか？」

へえ～そうですか、となるとカナはイ・ウーを崩壊させる為に、教授が緋弾の継承者として見込んでいた神崎・H・アリアを殺して、イ・ウーの未来を根絶やしにするつもりですね。その内に私を殺しにも来るでしょう。

教授は私に次期リーダーを任す氣で居るみたいですが、やる気はありませんしね。イ・ウーがどうなるようと構いません。
ですが殺されるのは嫌ですね～

どうせ殺しに来るとしても、カナ一人だけではなく、私のことを快く思つていらない、パトラや理子が仲良くセットで来るかもしれませんね。

まあ、私を殺しに来た人達をみんなセメントで固めて、東京湾に沈めてあげましょう。

「じゅせイ・ワーを崩壊させる為に、神崎・エ・アリアを殺すのだと思こますよ。緋弾の継承者ですから」

私がそう言い放つと、ジャンヌは驚いては面うず、薄々とは気付いていたみたいでした。

「やはり、桜もじゅう考えるのか……で、どう動くつもりなんだ？」

「私はだらだら過しますよ？ 万が一、緋弾の継承者に危機が訪れば、手助けしますけどね……教授（親友）は緋弾を継承する為に延命して150年も生きて来たんですから、その目的を是非とも達成して欲しいんですよ」

「せうか……なら私も桜側につくとじよつ。桜と敵対して戦つことなんて、もう一度としたくないからな」

ジャンヌは苦い顔をして、じつ言つた。

「で、重要な話はそれだけですか？」

「ああ、じゅうだ」

「なら今からは明るい話でもじまじょつか

私とジャンヌはそれから、服やアクセサリーの話で盛り上がり、気付けば夜中の3時になっていた。

「もう3時か。そろそろ私は帰るとじよつ

「そうですね～警備が手薄な夜中の間に出了方がいいですよ

私はジャンヌを見送りに玄関まで出る。

「じゃあ、また話がある時に伺うとします。今日は久々に長話が出来て楽しかった。ありがとうございます」

「いえいえ、用が無くてもいつでも来て下さいね」

「またな」

ジャンヌは私に手を振り、闇夜の中に消えて行つた。私もドアを閉め、鍵をかけ、布団に潜り込む。

じゃあそろそろ寝ますか。なんか明日寝坊しそうな気がしますが、まあいいでしょう。

それではおやすみなさい……

はい、どうも桜です。

完全に遅刻です。朝起きて時計を見ると10時を過ぎてこました。

こんな風になってしまった原因是絶対に深夜3時までジャンヌと喋っていたせいですね。

単位はある程度、取つてるので大丈夫だと思います。今日ははやつ
くつ寮で「口口口口」としました。

プルプル プルプル

おや？珍しく携帯が鳴つてます。滅多に携帯なんか使わないので解約しようと思つていたんですが、教授が『緊急時の連絡に必要だから持つてなさい』って言われたので持つては居ます。けど普段、持ち歩いていないので携帯の役目を果たしてません。

「はい？教授ですか？」

「ああ、私だ」

教授ですか、こんな真つ昼間からなんの用でしょう？

「なんですか？何か起つましたか？」

「桜よ、この時間にそつやつて電話が出来ると書つては、授業を
サボつてこるのかね？」

「いいえ、違います。昨日の晩にジャンヌが来て、お話をしましてから寝るのが遅くなってしまい、寝坊したんですよ。で、学校に行くのも面倒なので、『口口口』していると言つ訳です」

「それは客観的に見ればサボっているとしか思えないがね」

「失礼ですね！サボってなんかいません。寝坊しただけです。

「で、『』用件は？」

「桜よ、今からこちらに戻れるかい？パトラ、カナ、リュパン4世についての重要な話があるのだよ。このままだと桜がみんな殺しそうだからね。それでは不都合が起きてしまう。なので今回、私のビジョンを全て語るとしよう」

私がパトラ達を殺せば不都合が生じるって何故でしょうか？別にパトラは厄介者ですし、カナもイ・ウーを崩そうとしている張本人。理子は毎回毎回、鬱陶しいのでその内に殺ろうとは考えてましたがどうなんでしょう？

まあそのことは今から、潜水艦に赴いて教授に直接聞けばいい話ですね。

「分かりました。すぐに行きますよ」

「やうしてくれ、じゃあ潜水艦で待つていろ」

教授がやううと電話が切れた。

さてと、見つからないように行きますか。

真っ昼間から巡視艇を運転するのも疲れますが、仕方ありません。

私は私服に着替えて、携帯をポケットに入れ、部屋を出る。
そこから、巡視艇を隠してある場所に向かい、操縦室に入り、エンジンをかけて、出港した。

第3話（後書き）

『次回予告』

次回、桜は潜水艦に向かい、教授は自分自身が企む計画について全てのことを、話します。

それを聞いた桜が取る行動は如何に？

『お詫び』

え～2週間程、間が空いてしまってすみませんでした。
作者がファイナルファンタジー零式をやっていたので、投稿出来ませんでした。

10月27日以降、ユーチューバージにもアクセスせず、発売日と次の日は寝ずに徹夜でプレイしていました。

お陰様でレムがLV70まで育てられたので、そろそろ執筆を再開しようかと思います。

待っていた読者の皆さんすみませんでした。これから頑張つて行きますので応援よろしくお願ひします。

第4話（前書き）

『前回のあらすじ』

前回はジャンヌ・ダルクが桜の部屋に訪問し、親友として久々に長話をしました。

そして、次の日。夜中まで話をしていたせいで桜は寝坊してしまい。学校をサボり、昼寝をしようとした時、教授からの電話で潜水艦へと赴きました。

第4話

出港してから、一時間くらい私は船を操縦し、やっと潜水艦に辿り着き、中に入った。

「桜、待っていたよ。早速、話しをするとしよう」

「ええ、そうしましょうか、早めにしてくれた方が助かりますからね～速く帰つて昼寝がしたいですし」

教授は私を出迎えてくれた。そしていつもの部屋に向かい席につけた。

この機会に、疑問に思つていたディナーのことをつけて聞いてみると

としましょ。

「教授、そういうえば聞きたかったことがあるんですが、いつから私がご飯目的だと気付いていたのですか?」

私が頬杖をつきながら、そう聞くと教授は思い出す様に答えた。

「ああ、そのことが……3回目のディナーには気付いていたよ。桜がイ・ワーのリーダーを引き継ぐ気がないことはね」

「そうですか……ではなぜ教授は私をディナーに招待してくれたん

ですか？そして誰にリーダーを引き継がせる気なんですか？」

3回目の「ディナーで引き継ぐ気がないことに気付いていたのなら、もうディナーに誘つても意味がないはずです。

しかし、教授はそれが分かっていても、尚、私を「ディナーに誘つてくれました。そこが疑問に思う所ですね。

そして、私がリーダーをする気がないんですから、誰に引き継がせるつもりなのでしょうか？

「私が桜を「ディナーに誘つたのはリーダーを引き継がせる為だけではない。話し相手が欲しくてね。今、唯一の楽しみが桜と話することなのだよ。それに断られてからは、次期リーダーを擁するつもりは無くなつた。そして私は桜と同様にリーダーが居なくなつたイ・ウーは崩壊すると考えている」

ふむふむ。教授も一人だと寂しいと。そしてリーダーを失つたイ・ウーは崩壊すると考えている訳ですか。

教授は更に話し始める。

「で、私は君にパトラ、カナ、理子を殺してはいけないと言った。その理由を説明しよう……私の計画はアリアに緋弾を継承させることだ。それは分かっているかね？」

「ええ、分かっていますよ。教授は緋弾を継承する為に100年以

上待つてましたからね」「

「ならよろしい。私はイ・ウーが崩壊した後、再び宣戦会議が起ころと推測している。こうなれば緋弾を継承して間もないアリアではこの戦いを乗り越えて行くことは出来ないだろ?」

そこで私は『武僧殺し』の罪をアリアの母親に被せた。するとアリアは母親を助ける為にイ・ウーのメンバーを追う様になる。そして戦わせ、徐々に力を付けていく様に仕向ける。最初は理子、次はジャンヌと言う風にね

成る程……流石は教授。良く考えてますね。今後、起こることを予測しそれに向けて計画を進めて行つていると言つことですか。

「では、いざれ私が神崎とやり合つことに仕向けるんですか?」

「いや、桜とアリアが戦うことはない。もし戦つたとしてもアリアに勝ち目がないからね、それは一番、桜が分かつていてるだろ？？なんせ私でも勝てないのでから」

「まあそうですね。否定は出来ません。生きて来た年数もありますし、それは1000年間、修行を積んできた結果ですよ」

私がそう言つと教授は苦虫を噛み潰した表情を浮かべた。

「流石に1000年も修行を積む気にはなれないね。それに人間には寿命と言う限界がある。私は延命をし、なんとか生き延びては来

たが、天から迎えが来るのは、そう遠くはないだろう。だから桜よ。私に協力してくれ、理子や力ナを殺すのは当分、辞めてくれないだろ？」「

「分かりました。そう言つことなら辞めておきます。私が殺してしまえば、せつかく考えた計画が無駄になりますからね」

「ありがとうございます、感謝するよ」

その後、飛驒牛のステーキを食べ、ディナーを楽しみながら教授と色々な話をした。

ふと、時計を見ると8時を過ぎていました。

そろそろ帰りますか。

「もう8時を過ぎましたし、私はそろそろ帰るところです。昼寝が出来なくて残念ですけど、いつも教授と話をし、暇が潰せたので結果オーライです」

「ああ分かった。今日は重要な話が出来て良かつた。ありがとうございます」

「いえいえ」

私は教授に手を振り、潜水艦から出た。そして巡視艇に乗り、帰路につく。

港に着いた時には、もう9時半を過ぎていました。

ふわあ～眠い。早く寮に戻つて、お風呂に入つたら、寝ますかね。
「」飯は高級な物を沢山食べましたし、満足です。

夜道を一人で歩いていると、路地から、銀髪の少女が出てきた。

「ほんばんわ、ジャンヌ。こんな所で何してるんですか？」

「桜……少し話を聞いてくれ。」

ジャンヌの態度は硬く、重要な話があると直ぐに分かっていました。

「何ですか？話して下さる？」

私が話すように促すと、ジャンヌは言った。

「実はな、武偵高校に在学中の星枷白雪をイ・ウーに引き込み、遠山キンジを殺せと、教授から話があった」

「そうですか……」

「だから私は星枷を誘拐して、遠山を誘きだそうと考えている」

成る程、まずは理子をぶつけ、2番目にジャンヌをぶつけることにしてたんですね。多分、戦うのは神崎も来る可能性が高い。教授はジャンヌが敗れると思っているみたいですが、どうなんですかね。

ようかね？

ジャンヌは策士で慎重に敵の情報を探し、傾向を知つてから戦うタイプですから、今の未熟な神崎、キンジのコンビネーションでは負けてしまひでしょ。

理子との戦いにおいて、何処までコンビネーションを良くするかにかかるでいると私は思います。

で、ジャンヌと戦う時は私もついて行きますかね。

「まあ頑張つて下さいね。ですが白雪は警戒しないと、後で痛い目に遭つことになりますよ」

私がそう言つと、ジャンヌは一瞬、驚いた様子を見せました。

「桜は怒らないのか？仮にも桜の友達を殺すのだぞ？」

「別に構いませんよ。生きてきた中で何回も友人の死を見て来ましたから、死と言つモノに耐性が出来たみたいです。

こうしている時間も1000年間生きている内のほんの少しの時間ですからね。そんな悲しんで、ショボーンとしては人生楽しくないじゃないですか。だから早く気持ちを切り替えて、楽しく生きるんですよ。

それに私はキンジ達よりも、ジャンヌの方が大切ですから、教授の命令を全うして下さい。

まあ捕まってしまえば、司法取引でもして、武偵高校に入れればどう

ですか？ちょうど私はルームメイトが居ませんし、相部屋に出来ますよ？」

私はこうシビアに言いつつも、最後はキンジ達を助けに行くんですからね。

別にキンジ達が強くなるのであればいい訳ですから、死ななくとも大丈夫なはずです。

それに教授が腹を立てたとしても、私が居ればどうにかなります。

以前、と言つても100年以上前に教授と手合させしたことがありましたが、2分程度で倒しました。はつきり言つて弱いです。

私が手合させした中で一番手応えがあったのは、安倍晴明ですね。晴明は式神を何体も使って来るので、鬱陶しいの一言に過ぎます。そして一人称が『まる』ってwww思い出すと笑えますね。

「そうか……私はてつきり桜が怒ると思つていたが、本当にいいんだな？」

「ええ、構いませんよ？」

「分かった、桜に確認を取りたかっただけだ」

ジャンヌは『じゅあな』と言い残し、闇の中に消えて行つた。

ふう～ポーカーフェイスを保つのは大変です。結局、ジャンヌと敵対することになりますか……会つた時の顔が楽しみですね。

寮に着くと、12時を過ぎており、とても静かでした。階段を登り鍵を開け中に入った。そしてシャワーを浴びて、布団に潜る。

今日は色々ありましたね～2日連続ジャンヌと遭いましたし、今後事態は急変しそうです。

超人ランクのN.O.・1にランギングされていますが、名前が『魔弾の暗殺者』としてランクインしているので、大丈夫です。リアル割れしない限りは狙われることはないでしょう。まあ知っているのは教授とジャンヌ辺りだけですし。

さあ寝ますか……おやすみなさい

（次の朝）

ふわあ～ダルい…………今日もサボっちゃいましょうか？サボター
ジユ！

まあやりますせんけど……

じゃあ一日、ぶつて学校に出発します。部屋を出ると、トコ由雪が居ました。

「あつー桜ちゃんーおはよー」

「おはよー、由雪」

朝の挨拶を交わした後、一緒に登校することになった。

「桜ちゃん、なんで昨日は学校を休んでいたの?」

「昨日は寝坊したから、行く気が失せて、京都に一日帰り旅行に行つてたのよ」

「そうなんだ……あのね、桜ちゃん。昨日は大変だったんだよ?『武僧殺し』がバスジャックを起こしたらしこの

はいー嘘つきました。京都になんて行くはずがありません。

かなり前に住んでいましたが、無駄に都市開発が進んだせいで、平安の頃の趣がなくなり、嫌になつて、宇治市の方に引っ越しましたね~なんと懐かしい

で、理子がまた動き始めましたか……で、私はどうしましようかね?ジャンヌとぶつかる時まで動くのをやめるのか、それとも理子の

『武偵殺し』に介入するのか。

「そうなの……大変だったでしょうね」

歩いている内に、いつもの分岐点に着いたので、白雪と別れました。そして校舎の階段を登り、教室に入ります。

「おはよう、桜」

「おはようございます」

キンジと朝の挨拶を済ませると、私は席に着いた。
あれ？ 神崎が居ませんね～どうかしたんでしょうか？

気になりつつも、5時間目まで、だらだら過ごし、放課後になると、キンジは足早に教室を出ていきました。

私は強襲科の授業に出るのが面倒だったので、寮に帰り、寝ることにします。

5分くらい歩き、私が寮に着くと同時に理子が出てきました。
う～ん……何処に行くのでしょうか？ まさか『武偵殺し』の準備に向かうとか？

ですが、今の私は知的好奇心よりも眠気の方が勝っていたので、尾行はせずに、部屋で寝ることにしました。

押し入れから枕だけを出し、
寝寝開始！

3 時間後

うつ んつ ふわあ～

な、なんですか？気持ちよく寝てこたの、元起しそうな……全く、いくら教授でも許しません！

私は携帯を開いた。液晶画面には『教授』と表示されている。ボタンを押し、電話にでた。

「『やあ、ヤー』現在、昼寝をしていた所を起こされて、かなりイライラしているので、電話に出ることが出来ません。もし詫びる気持ちがあるのならば、次回のティナーで米沢牛のステーキ（500g以上）を用意して下さい。さもなくば、その原子力潜水艦が太平

洋のド真ん中で爆発し、環境に多大なる影響を『える』ことになります。

後、忘れていましたが、ぴ～っと言つ音の後にお名前とじり用件をお話下さい。ですが依頼の場合は受理されません……。ぴ～～

私はそつと、お前と用件を言つ隙を『えず、電話を切つた。

ふう～昼寝の続きですね。さあ寝ましょ～。

『ふるふるふる……』

またかかつてきましたね～仕方がありません。話だけでも聞いてあげますか。

「なんですか？」

「桜……昼寝中に済まなかつた。だが、重要な任務が出来た」

「嫌ですよ～。昼寝の続きがありますし、行きませんからね」

「実はな、今からリュパン4世がアリアと直接対決をするらしい…

…」

「で？ それがどうかしましたか？ 私は昼寝の続きがあるので、でわでわ」

「待ちたまえ桜、見てきてくれるのなら、米沢牛以外にも神戸牛や佐賀牛のステーキを用意するよ」

「…………仕方ありませんね、行きますよ。見てこればいいんですね？」

私は電話を切り、支度をし、メールで送られて来た場所に向かうことにしました。

決して食べ物に釣られた訳ではありませんからね！釣られた訳ではありませんよ？

第4話（後書き）

『次回予告』

次回はいよいよ、理子の『武偵殺し』がクライマックスを迎え、アリアと理子の直接対決になります

そこに桜が介入して……果たしてどうなるのか？お楽しみに～
(次回は諸事情により、12月8日以降の投稿となります)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167x/>

緋弾のアリア～イ・ウーのだらだら少女～

2011年11月23日21時48分発行